



総合型地域スポーツクラブ 公式メールマガジン

平成26年度 総集編

2. 座談会

座談会テーマ

-
- 1 クラブに関わる人材の発掘・確保、育成
～「人材」に関わる情報提供とネットワーク化について～
 - 2 総合型クラブとラグビーワールドカップ2019
～お互いがもたらす未来への取り組み～
 - 3 東京オリンピック・パラリンピック×総合型クラブ
～みんなで"参加する"オリンピック・パラリンピックへ～



スポーツ振興くじ助成事業



公益財団法人

日本体育協会

INDEX

2. 座談会企画

(1) クラブに関わる人材の発掘・確保、育成 [第105号(平成26年5月20日発行)]

～「人材」に関わる情報提供とネットワーク化について～

◇対談者◇

○桑田健秀氏(NPO法人地域総合スポーツクラブピボットフット 理事長、
SC全国ネットワーク<総合型地域スポーツクラブ全国協議会>幹事長)

○紙本 諭氏(NPO法人はちきたSC 理事長)

○飯田満美子氏(あしがら総合型スポーツクラブ「あすぼ」クラブマネージャー)

[総合型クラブに関わる人材はどのように発掘しているのか](#) 3[クラブ理念の共有を最優先にそれぞれのクラブに合う育成を](#) 5[「今」「どこに」「どんな」人材 そんな情報が分かるシステムを](#) 7

(2) 総合型クラブとラグビーワールドカップ2019 [第111号(平成27年1月20日発行)]

～お互いがもたらす未来への取り組み～

◇対談者◇

○徳増浩司氏(公益財団法人ラグビーワールドカップ2019組織委員会 事務局長)

○熊木陽一郎氏(公益財団法人ラグビーフットボール協会 競技普及部門 部門長)

○西機 真氏(公益財団法人ラグビーフットボール協会RWC2019委員会 委員)

○菊地 正氏(NPO 法人高津総合スポーツクラブSELF 副理事長)

総合型地域スポーツクラブ公式メールマガジン 編集委員長)

[対 談](#) 9[ラグビーかんたん観戦ガイド](#) 12

(3) 東京オリンピック・パラリンピック×総合型クラブ [第112号(平成27年2月20日発行)]

～みんなで"参加する"オリンピック・パラリンピックへ～

◇対談者◇

○菊地 正氏(NPO 法人高津総合スポーツクラブSELF 副理事長)

総合型地域スポーツクラブ公式メールマガジン 編集委員長)

○二宮雅也氏(文教大学人間科学部人間科学科 准教授)

○但野秀信氏(NPO法人日本スポーツボランティアネットワーク 公益財団法人笹川スポーツ財団)

[対 談](#) 13

座談会 クラブに関わる人材の発掘・確保、育成

～「人材」に関わる情報提供と ネットワーク化について～

theme 1

総合型クラブ運営において、その活動基盤をより充実させるための人材の活用は、常に大きな課題の一つとなっています。スポーツ指導者の他、法律や財務面をはじめとする一定の専門的能力や経験を有した人材を、どのようにして発掘・確保するのか、また、そういった人材を育成するには何が必要なのかなど、各クラブの抱える問題はさまざまです。そこで今回、人材の育成を含む「クラブに関わる人材の発掘・確保、育成」について、異なる視点を持つ3名の識者の方にお話を伺いました。



対談者

桑田 健秀氏

NPO法人地域総合スポーツクラブ ピボットフット 理事長
SC全国ネットワーク(総合型地域スポーツクラブ全国協議会) 幹事長

紙本 諭氏

NPO法人はちきたSC 理事長

飯田 満美子氏

あしがら総合型スポーツクラブ「あすぽ」クラブマネジャー

総合型クラブに関わる人材は
どのように発掘しているのか

桑田(敬称略) 人材には、スポーツの指導をする技術スタッフと運営スタッフの2種類があります。指導者については、自分も携りながら、バスケットボール界での人脈を生かして資格を持つ人に声を掛けるなどしていました。運営スタッフに関しても、バスケット仲間である税理士や会計士にヘルプをお願いするなど、身近なつながりを活用していましたね。その後、テニスなど、さまざまな競技へのクラブ運営の広がりとともに、人材の発掘も広がっていきましたが、当初はまさに手探りでした。

クラブ事業が発展し始めてからは、学生が就職活動で来ることもありましたが、「人を雇用できる財源規模」を得るのは困難で雇用は難しかったです。クラブにボランティアアシスタントは必要ですし、大変ありがたい存在ですが、一方、それだけでは運営できないのも事実。実際に、私が行っている運営に関する業務を引き継げる人材の発掘には苦労しています。

紙本(敬称略) 今年で、私たちのクラブスタッフは8名になりました。私は、サッカーをしていて、体育教師になりサッカー部の顧問になりたいという夢を持っていましたが、大学の授業で見たドイツ



桑田 健秀

の地域スポーツクラブの映像に影響を受け、「これを作りたい」と決意したのが、クラブを始めたキッカです。何の資源もなくゼロからのスタートでした。十分な収入もないためアルバイトをしながら、指導、運営、営業と自分一人です。そんな期間が5年ほど続きました。その仕事では次第に、地域の方がボランティアで協力してくださるようになり、現在は、雇用面でも新しい人材がいよいよサイクルに入っています。ありがたいことに、優秀な方々が集まってくれているため、人材の発掘に関しては、あまり苦労はありません。ただ、私自身が正職員となったことで今まで頑張れたという実感があるので、人材の確保という面では、集まった方々を雇用できるよう、さらなる努力が必要だと思っています。それと、スタッフを迎え入れる際は、クラブの理念を、しっかりと

伝えなければいけません。我々の場合は、スポーツで八王子を活性化するという理念、それに賛同してくれる人材が基本です。

飯田(敬称略) 私たちの「あすぼ」は、ママ友達数名が半ば勢いで「よしやるぞー」と立ち上げたようなクラブなので、人材の発掘に雇用を考えるようなことはありませんでした。スタッフも、私を含めて全員が子育て中です。お母さんたちが「行きたい」と思った時にいつでも行けるレッスンとして、平日に日替わりで託児付きのエクササイズを始めたのですが運営は大変でした。その様子を見た会員さんがお手伝いしてくださるようになり、そういった方の中からスタッフになっていただいています。今は主婦とはいえ、幼稚園の先生やイベントを企画されていた方、ホームページ作成ができる方など、



紙本 諭



飯田 満美子

ますね。
桑田 私たちもクラブの会員になっているお子さんを持つ親御さんに、協力をお願いした経験があります。子どもが一生懸命になっていることに、一緒に取り組めると喜んでいただける方もいますし、そこから大人向けの教室の開催につながるなど、いろいろな発展があります。

もともと社会で活躍されていた方も多く、それぞれに得意分野を持つスタッフが集まっています。大袈裟ですが、子育て中のお母さんの社会復帰の場にもなっています。指導者の発掘は、育児休暇中のインストラクターに、会員さんと一緒に託児システムを利用していただきレッスンをお願いしたり、会員さんの中で指導経験がある方の日本体育協会公認スポーツリーダー資格取得を支援したりしました。

以前、指導を希望された方にレッスンをお願いしたら「1年間、あすぼのレッスンに参加した上で、会員さんが求めるレッスンを作りたい」と言われ、実際にその後、クラシック音楽を使った独自の体操レッスンを始めてくれた例もあります。普段から会員さんとの会話を大切にするので、それがクラブの発展につながることもあり

紙本 会員さんにお手伝いをお願いするのは、利用する側と運営側の境界線をなくし、地域全体で「クラブを作っている」という意識を持つていただけるという利点もあります。これは、地域に密着することで、応援されるクラブになるためにも重要なことです。来ているみなさんが営業というか、お知り合いの方達にクラブの話をしていただき、お友達を連れて来てくださることも大きなお手伝いです。また、時間は掛かりますが、クラブで育った子どもたちが、クラブで学んだことを次世代にも伝えたいと思ってくれる循環ができれば最高ですね。私のクラブでは、幸せなことに、今年、大学に進学したクラブの一期生が、「コーチをさせてほしい」と戻ってきてくれました。会員さんからの人材の発掘に関しては、こういった長い目で見た人材の確保と、地域のみなさんを仲間にするという門戸の広さの二本立てが必要だと思っています。

座談会 クラブに関わる人材の発掘・確保・育成

～「人材」に関わる情報提供と
ネットワーク化について～

theme 2



クラブ理念の共有を最優先に
それぞれのクラブに合う育成を

飯田 私たちの場合、育成と言っても、「プロフェッショナルの育成」とは違うかもしれません。スタッフの方には、簡単な受付や託児のお手伝いから始めていただき、その方の長所を生かした役割分担を心掛け、徐々に仕事を覚えていただいています。

助成金の減少などもあり、昨年末に受付スタッフの従業員を減らしましたが、クラブでの仕事がない日も、レッスンに参加するなど、スタッフの足が遠のくことはありませんでした。普段から率先して行っていたコミュニケーションのおかげで、「あすぽ」がストレス解消の場、元気を貰う場になっているのだと思います。スタッフと話しし意見をどんどん取り入れて、やる気をアップしてもらうことが、クラブへの愛着を生み、結果的に人材の育成になっているのかもしれない。

紙本 クラブを立ち上げた初期は、日毎に仕事が増らんでいきました。もともと私は、指導のプロではなかったのですが、指導者の育成の意味も含めて、現場を少しずつスタッフに任せて、自分は運営に専念するという仕事の分担をしましたね。それにはスポーツ界において、指導者を目指す人は多いが、運営の仕事を目指する人材は、ま



飯田 私も、理念は大切だと思いません。設立準備時期に、クラブアドバイザーの指導を受けながら理念

事をする姿勢が必要です。
紙本 桑田さんのおっしゃる通り、理念の共有と自分で成長しようというモチベーションは大事です。クラブでは、現場の指導者に営業活動や経理をお願いすることもあります。振り分けた仕事だけでなく、率先して多岐にわたる仕事をやる姿勢が必要です。

になる仕事をしたという、根本的な人間性や社会性が問われます。そういう理念の部分で共有できているスタッフが多ければ多いほど大きなパワーになりますね。
技術指導や運営、関連団体とのやり取り、それぞれを若手が経験のあるスタッフと同じレベルで行動することは難しくても、同じ理念を生活レベルで持っているれば近づけることができます。

まだまだ少ないという背景もあります。現在、運営スタッフは、私の他、正職員が1名、アルバイト1名の3名です。運営スタッフを育てるのは、私の中ではある意味、指導者を育てるよりも難しさがあります。ただ、最近では、クラブを立ち上げたいという目標を持つ人も現れるようになり変化を感じています。大学などでマネジメントの学科が増えたことが理由の一つかもしれません。



作りをしたのですが、その時は、実務に追われていて必要性を感じませんでした。ただ、いざ活動を始めてみると、共通して言える理念があることで新しいスタッフが入っても目的がブレません。その時のアドバイザーさんには感謝しています。

桑田 また、総合型クラブはボランティア主体と雇用主体の所があり、両者間で経営の話をして共有可能でない部分が出てきます。育成に関してもそれは同じで、その内容や方法も変わってくると思います。
飯田 そういう意味では、私たちの施設は、ボランティアが主体のクラブと言えますが、今はいいスタッフに恵まれています。一方で、子育てがひと段落すると、社会復帰してクラブからは離れてしまうという問題も抱えているため、資金繰りができれば、クラブを雇用の場にしたいという思いもあります。

桑田 実務の育成は、実際に仕事をさせるしかないと考えています。ただし、総合型クラブでは、指導者も運営スタッフも、単に業務ができれば良い訳ではありません。スポーツを通して地域社会のため



桑田 ボランティアスタッフの私たちは、お金のために来る訳ではない、けれども、交通費くらいは……という思いはあるところですからね。
紙本 ボランティアスタッフのモチベーションを保つのは難しいですよ。
桑田 東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まったことでスポーツ市場の雇用も変わってくるはずですよ。そういう意味では、クラブの運営や人材育成も、時代背景の変化に対応しなければいけません。指導者資格制度なども、それに即して、大きな改革ではなく、「味付けを変えろ」といった変化はして欲しいと思います。

座談会 クラブに関わる人材の発掘・確保、育成

～「人材」に関する情報提供と ネットワーク化について～

theme 3



「今」どこに「どんな」人材
そんな情報が分かるシステムを

桑田 有能かつ地域スポーツクラブでの指導を経験している指導者の情報が分かるポータルサイトは必要です。自分のクラブで教室を開きたいと思ったときに、今、近隣でどんな人材がいるのか「生きた指導者」が分かるプラットフォームですね。それは指導者にとっても、一箇所のクラブの収入だけではなく、多くのクラブから収入を得られる機会にもなります。

それと、クラブ経営者が悩みや疑問を相談する場がないという問題もよく聞きます。経験者同士がマイクロレベルの情報交換をする場としてのネットワークなども、必要ではないかと思えます。それらの情報を全国的に共有できるシステム作りをするべきだと思います。

飯田 私たちのクラブでは、隣町の総合型クラブから、指導者に来ていただいています。こういった人材の共有は、クラブの交流会などで、直接、相談させていただき実現したものです。私たちは主婦が中心のクラブですので、夜に教室を開催することなど、地域すべてのニーズに合う活動は難しい話です。そのため、自分のクラブだけのために活動するのではなく、近隣のクラブと定期的に交流し、お互いの事業を理解しながら協力し



合っています。地域全体で、一緒にスポーツの力によって住む人を元気に健康にしていき、地域全体の活性を目指すことが、結果、自分たちのクラブの活性に繋がるという考えに行き着きました。

桑田 私のクラブでは地域団体との人材の共有や連携の事例はないですが、日頃、技術や社会活動などさまざまな分野の指導をしたい人のニーズと、教えられたい側のニーズを結びつけるシステムが欲しいとは感じています。

地域の方の「こんな教室が欲しい」というニーズに、自分のクラブでは応えられない時に、「隣町のここですっていますよ」といった紹介ができる。そのように都道府県内のクラブ間で情報共有できるのは、非常に大きなことだと思います。ネットワークシステムの構築も必要ですが、それだけではなく、現場が欲しているのはそういう



うことかもしれません。

紙本 自分たちの力だけで、さまざまな種類の指導者を見つけるのは困難です。うちのようには王子という立地で駅からバスで30分掛かるとなると尚更です。さまざまなプログラムを持つ都心のクラブと指導者を共有するのは現実的ではなく、近隣クラブとの共有が必要ですが、それも、指導をお願いする時間帯がかぶってしまうなど難しさがあります。

チアダンスなど、民間の団体が指導者を何名か抱えている競技もあります。ただ、派遣の依頼にはお金が掛かってしまうので、すべてのクラブが頼れる方法ではありません。

桑田 何か情報が欲しいと思った時に、当事者間で会って話すしか



方法がないというのではなく、各地のクラブ運営者が、指導者発掘や財源確保といった問題の解決にどのように取り組んでいるかが分かるネットワークが必要ですね。

私のように元競技者の人間は、現役を終えたら教える側になりたいと考える人がたくさんいます。私のところにも相談に来る人がたくさんいます。現在は、可能であれば場所の提供をするなどのサポートをしますが、すべてを受け入れマネジメントをすることはできません。運営側とスタッフ、指導者、そして利用者、それらをつなげる制度やネットワークが確立すれば、総合型クラブの発展につながりますね。

(終了)



飯田 満美子 いいだ・まみこ

あしがら総合型スポーツクラブ「あすば」クラブマネジャー。子育て真っ盛りの小学生二児の母。地域で自身の子どもを通わせる為の体操サークルを運営中に総合型クラブの存在を知る。同じく子育て中のママ友達と協力し「日本一子育てがしやすい地域へ」の理念のもと、平成23年に同クラブを設立。「ママの元気は家族の元気」をモットーとした活動で、託児付きのエクササイズクラス、幼児体操クラスや未就園児の親子体操教室、ジュニア水泳クラスなどを開催している。

桑田 健秀 くわた・きよひで

NPO法人地域総合スポーツ倶楽部ピボットフット理事長。SC全国ネットワーク(総合型地域スポーツクラブ全国協議会)幹事長。中学校でバスケットボールを始め、高校在学時に全日本ジュニア選出、慶應義塾大学在学時は、夏季ユニバーシアードに出場している。卒業後、日本鋼管に入社し日本リーグや全日本総合バスケットボール選手権での優勝に貢献、モントリオールオリンピックにも出場するなど、全日本で11年間プレーした。アマチュアスポーツ衰退への危機感、バスケットボールリーグのプロ化に関わりを持ったことをきっかけに、平成15年同クラブを設立。

紙本 諭 かみもと・さとる

NPO法人はちぎたSC理事長。日本体育協会公認クラブマネジャー。少年時代からサッカーに打ち込み「スポーツで人を熱くさせたい」と、地元である東京都八王子市にNPO法人はちぎたSCを設立。スポーツを通じて地域の活性化を目指す。将来は八王子の地域スポーツクラブとしてJリーグ参入を目標としており、サッカーを柱としたクラブ事業は、現在、会員数1000名を超えるクラブとなっている。その他「総合型スポーツクラブの実際」をテーマに早稲田大学、上智大学をはじめ、多くの講演も行う。

座談会

総合型クラブとラグビーワールドカップ2019 ～お互いがもたらす未来への取り組み～

4年に一度の世界一決定戦であるラグビーワールドカップが2019年9月に日本で開催されます。今回は、4年後の一大イベントに向けた組織委員会の取り組みや総合型クラブが貢献できることなどについて、それぞれの立場でのお話を伺いました。

対談者

徳増浩司氏
公益財団法人ラグビーワールドカップ2019組織委員会 事務局長
熊木陽一郎氏
公益財団法人日本ラグビーフットボール協会 競技普及部門 部門長
西機 真氏
公益財団法人日本ラグビーフットボール協会 RWC2019委員会 委員
菊地 正氏
NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF 副理事長
総合型地域スポーツクラブ公式メールマガジン 編集委員長



写真左から／熊木陽一郎氏、菊地正氏、徳増浩司氏、西機真氏



熊木陽一郎

熊木 これからの課題でもあるのですが、総合型クラブとの関わりは、これまであまり実例がなく、指導依



菊地 正

頼み、総合型クラブが貢献できることについてお伺いできればと思っています。

4年後のラグビーW杯へ向けた
ラグビー普及への取り組み

菊地 (以下敬称略) ラグビーのワールドカップ(以下、ラグビーW杯)

が2019年に日本で開催されることが決まりました。今回は、総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブ)関係者へ向けてラグビーW杯を周知するとともに、一緒に大会を盛り上げる方法やラグビーの普及に、総合型クラブが貢献できることについてお伺いできればと思っています。

頼を受けてスポーツ少年団や学校で活動することがほとんどでした。

菊地 確かに、全国でも、ラグビーを定期的なプログラムとして取り入れている総合型クラブは少ないですね。ただ、総合型クラブでは幼児から加齢者までがそれぞれに楽しめる多種目のプログラムを用意しています。子どもたちにスポーツを好きになってもらい、お年寄りとも交流を持つてもらいたいことを主体に活動していますので、多世代でラグビーを楽しむ場所としてはいいのではないかと思います。

徳増 そうですね。大会終了後も老若男女を問わず、ラグビーに親しんでいただき、ラグビーの素晴らしさを伝えていくために総合型クラブとの連携は欠かせないものだと感じますね。



徳増浩司

菊地 私たちのクラブがある川崎市では、約8年前にアメリカンフットボール(以下、アメフト)W杯を開催しました。大会後は、フラッグフツ

トボールが市内の小学校の授業に取り入れられ、総合型クラブが指導者の派遣や育成を手伝うシステムが、徐々にできています。ラグビーでもこのような取り組みで連携を図って普及の糸をつなげることは可能だと考えます。

西機 我々は、これからスポーツに関わりのない人も含めた、多くの世代にラグビーの魅力を広めたいと考えています。そういう意味で、子どもたちも楽しめるラグビーなどの種目を知っていただく機会作りは必要だなと思います。私自身、海外で総合型クラブの文化が地域に根付いている環境を経験しています。日本にもそのようなラグビークラブを作ろうと考え、帰国後、いくつかの助成金を得ながら総合型クラブに似た活動を積極的に取り組んできました。両方の立場を知る身として、それぞれの役割を線引きするのはな

くお互いが歩み寄り、先も見据えた活動がしたいですね。



西機 真

イギリスでのW杯終了後が日本開催への真のスタート

徳増 今年3月に開催都市が決まり、そして、キャンプ地も決定しますが、日本開催へ向けた大きなターニングポイントは、今年の9月から行われるイギリスでのラグビーW杯後だと考えています。加速度的に日本へ注目が集まったそのとき、開催都市やキャンプ地を拠点にしたPR活動などを用意しているところで

西機 イギリスではW杯に向けて、各ラグビークラブのクラブハウスを「みんながあつまる場所」として充実させることに一番力を注いでいます。その次に力を入れたのが、以前クラブにいた人たちを、レフェリーやコーチ、また、運営スタッフなどのボランティアと呼び戻すこと、そして、コアファンではない人

たちへのアプローチのためタッチラグビーのセンターを各地に作ることで、これはラグビークラブの話ですが、スポーツに置き換えれば、総合型クラブが目標としていることも近いのではないのでしょうか。

菊地 その通りですね。実際には、まずラグビーを取り入れようと考え、きつかけが欲しいところ。川崎市や世田谷区にはジュニアチームもありませんが、近隣地域のチーム数が少ないため3、400人の子どものレベルでは活動できなくなっています。もう少しチームが分散して学校施設での活動が可能になれば、総合型クラブのプログラムとしても身近なものになると思います。

徳増 私たちがラグビーW杯に向け掲げた4つのビジョン(上記参照)に「すべての人が楽しめる大会にしよう」というのがあります。ラグビーは「ノーサイド精神」にこだわりがありますが、それに固執しすぎると排他的になってしまう。あえてラグビーを外したビジョンを大きく掲げることで、これまでスポーツに関係のなかった人たちにも一緒に取り組んでいただきスポーツ全体の関心を高めることができたと思っっています。実際には、ラグビーW杯の盛り上げに向けて、総合型クラブとどのように協働できるでしょうか?

ラグビーワールドカップ2019大会ビジョン

成功に導くための4つの柱

- ①「強いニッポン」で世界の人々をおもてなししよう
- ②すべての人が楽しめる大会にしよう
- ③ラグビーの精神を世の中に伝えよう
- ④アジアにおけるグローバルスポーツの発展に貢献しよう



菊地 こういった大きなスポーツイベントに協力したいと考える地域や総合型クラブはたくさんあります。ラグビーW杯のように全国各地で開催される大会ではキャンプ地としての協力を筆頭に、さまざまなことでの貢献は可能だと考えます。また、翌年にオリンピック・パラリンピックもあるとなれば地域として全面的に協力するという機運はさらに高まっていくと思います。

徳増 どうしても注目がオリンピック・パラリンピックに集中してしまっているのは、私たちも痛感しています。ただ、それをビハインドにするのではなく、一緒にやっつけていこうという取り方をして、オリンピック・パラリンピックの組織委員会とは月1回情報交換をしているところです。

菊地 総合型クラブは、地方公共団体とともに活動することも多いので、その部分でも協力できると思います。公共施設などの指定管理をしているところは、開催都市になれば直接的なお手伝いもできるはずですよ。

徳増 ラグビー界にとって、これらの期間はラグビーを知っていたら、絶対の機会です。最近では、上智大学から学生のグローバル化の一環として、オリンピック・パラリンピックやラグビーW杯のボランティア活動のための公開講座を開設すると

いう話や、神田外語大学からは、学生の語学力を生かしたボランティア活動をしたいという話もいただきました。二度とないチャンスの中で、そういった協働への取り組みも発信していきたいと考えています。

総合型クラブとともに歩み ラグビーの輪を広げたい

西機 私は、2019年の開催までに行動や価値観の変化を作ることが、終了後の変化にもつながると思っています。大切なのは、これからの4年をどう変化につなげることができるかです。ラグビーの中にも、タグラグビー、タッチラグビー、ビーチラグビー、また、車いすラグビーや聴覚障がい者のラグビーがあります。そういった多世代で楽しめる多趣向の種目が、ラグビーにも存在することを広く伝えていきたいですね。ラグビーW杯もオリンピック・パラリンピックもスポーツ文化という意味では、何らかの共通メッセージを持てるはずですよ。総合型クラブの存在は、それらの大会にひとつの価値を示して取り組みやプロモーションができる可能性のある地域のコミュニティだと思っています。

菊地 このようなスポーツイベント後に、どう日本のスポーツと関わるのかは、総合型クラブにとっても大きな課題です。終了後に、さあこれ

から何をしましょう？では、何も変わりません。我々にとってもどう成長できるのか問われるこれからの期間に、子どもたちの育成や地域づくりにどのように貢献していくのか、ぜひ、ここは一緒に共有して活動していくべきだと思います。

西機 その部分で、我々はラグビーとしてリーダーシップを発揮しながら、総合型クラブの理念を伝えられたいですね。

熊木 現在、文部科学省と一緒にタグラグビーを学校の体育に取り入れる活動を行っています。体育カリキュラムとしてのタグラグビーの有効性が、今、試されている時期です。例えば、実施が決まったとき、授業でタグラグビーをおもしろいと感じた子どもたちに次のチャンスを与えられる場合は、総合型クラブになると思います。そこにも共存・共栄の活路があると思っています。場所の確保が困難と言われることもあります。ラグビーには、インドアでも安全に楽しくラグビーボールに触れられる運動方法もあります。そういった部分も含めて共有していきたいですね。

菊地 最初は、ラグビーボールに触れる機会を作るだけでもいいのかもしれないですね。子どもたちは、自分で楽しみ方を見つけるのが上手ですから。

西機 今は、教員の方々に対してタグラグビーの指導者を派遣する活動にも取り組んでいます。総合型クラブから、そういったオファーがあったとき、すぐに提供できるように、我々も人材育成や道具の調達などの仕組みづくりを同時進行していく必要があります。

熊木 それと、ラグビーを知っていただく機会を作ること大切ですね。知ってからだ、ラグビーW杯という世界大会が日本で開催されることへの感じ方も変わるといえます。ラグビーの魅力は、決して15人がガツガツぶつかるだけではなくありません。楽しみ方についてもコンテンツをご提供できればと思います。

徳増 以前、フットサルコートで、みんながサッカーやフットサルをしている中、ラグビーのミニゲームをしていたら、お母さんたちが、「何このスポーツ」と、興味を持って下さいました。そういう機会を少しずつ作りたいです。

菊地 総合型クラブの基本理念である多趣味には、子どもたちにいるいろいろなスポーツに親しんでほしいという意味合いもあります。ラグビーにも触れる機会があれば、興味を持つ子は絶対に出てくるはず、そういう環境を作ってあげることがまず大事ですね。

NEW スポーツ『タグラグビー』とは タックルなしのラグビー？



タグラグビーとは、イギリスで生まれた新しい形のラグビーゲームです。ボールはラグビーと同じ楕円球を使用しますが、15人制ラグビーの大きな特徴でもあるタックルのような激しい身体接触は一切ありません。そのため、誰でも安全にゲームを楽しむことができます。

タグラグビーを行うプレーヤーは、まず、左右に1本ずつ帯状のタグ(リボン)がついたベルトを腰にまきます。

攻めるプレーヤーはボールを抱えて走ったり、横や後ろにいる味方にボールを渡したり(前方へのパスは禁止)しながら前進し、相手のゴールラインを目指します。

ゴールラインを越えたところにボールを置けばトライで得点(1点)となります。

ボールを持って走っていても、守るプレーヤーに左右どちらかのタグをとられたら、走るのをやめ、ボールをパスしなければなりません。つまり守るプレーヤーは、相手をタックルして止める代わりに、タグをとることで前進をストップさせるというわけです。

このような攻防を繰り返しながら、女性はもちろん小学生でもランニングとパスによるスピーディーなゲームが展開されていきます。

○タグラグビー公式ウェブサイトはコチラから ⇒ <http://www.tagrugby-japan.jp/>

(タグ)ラグビーを実施しているクラブ

長崎ラグビースポーツクラブ(長崎県長崎市)

■(タグ)ラグビーを導入したきっかけとは

1969年に長崎県で開催された国体のラグビー競技において、長崎県は競技別で総合優勝という結果を残すことができました。この成績を、ジュニア層育成の絶好の機会として、1971年に長崎ラグビースクール(NRS)が創設。その後、よりラグビーを普及させるため、総合型クラブの立ち上げに力を注ぎ、2006年にNRSを母体に長崎ラグビースポーツクラブが創設されました。クラブではタグラグビーも創設時より導入しています。

■指導者および参加者の確保について

当初はラグビー経験者に指導を依頼し、同時に指導者の育成も行いながら活動した結果、現在、約40名の指導者が在籍しています。指導者への謝金はなく、活動は関係者相互の信頼関係と意欲ある人材により成り立っています。

参加者や会員は、行政の掲示板や商業施設、地元店舗にポスターを掲示して募りましたが、何よりも効果が高かったのは指導者から知り合い(保護者)、また、保護者間での口コミでした。クラブにとっては口コミが一番の宣伝効果のようです。

■(タグ)ラグビーを導入したことによる効果

地域おけるラグビーの普及はもちろん、高校ラグビーの強化につながっています。また、ボランティア活動にも力を入れ、「ONE FOR ALL・ALL FOR ONE」や「ノーサイド」といったラグビー精神を理解した子どもたちは、「自立」の気持ちが強くなったようです。

■(タグ)ラグビーが総合型クラブに浸透するために

保護者の方々との連携を強化し、親と子が一緒に参加できるクラブづくりが必要です。例えば、ホームステイによる宿泊をともなうラグビーを楽しむための交流会など、子どもが興味を示すようなイベントの企画や運営が必要です。

(長崎県クラブアドバイザー 田原由美)

NPO法人 よりづか☆ちよいスポ倶楽部(北海道北広島市)

■(タグ)ラグビーを導入したきっかけとは

ラグビー指導員の資格を持つスタッフがいたことから総合型クラブの普及を兼ねて実施した最初の教室がタグラグビーでした。当時は、全国でもタグラグビーが普及の段階だったこともあり、北海道ラグビーフットボール協会から用具や指導者を無償で確保できたことも、準備を進める上で大きなメリットでした。2008年のクラブ設立後は、タグラグビー教室がクラブのメイン事業になっています。

■指導者および参加者の確保について

子どもを対象に実施したプログラムでは、幼稚園児から中学生までが同じフィールドで楽しみながらプレーし、さらにお母さんにも参加していただき、子どもたちと同じ目線で競技に取り組んでいただきました。こうしたことがきっかけで、コーチとして日中のクラブ活動をサポートして下さるようになった方もいます。保護者の方にクラブを手伝っていただくことは、人材の確保だけでなく、地域の子どもたちとクラブをつなぐことにも役立っています。

■(タグ)ラグビーを導入したことによる効果

タグラグビーには、鬼ごっこのような要素があり、子どもたちは楽しんで取り組むことができます。また、楕円形のボールは初めて触れるという人が多く、誰もが同じスタートラインから始められることや、身体への接触が反則のため、年長者と年少者が一緒にプレーすることも魅力です。誰もが同じ空間で楽しむことができるスポーツです。

■(タグ)ラグビーが総合型クラブに浸透するために

タグラグビーは、それぞれがみんなのために一つのボールをつなげていく、「つなぐ」がキーワードの現代だからこそ活用していただきたいスポーツです。ルールも難しくなく、かつ安全な楽しいスポーツであることを、まず広く知っていただきたいと思っています。

(北海道クラブアドバイザー 久保田 智)

東京オリンピック・パラリンピック
×
総合型クラブ

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ

日本のスポーツ推進に大きく寄与するであろう、2020年の東京オリンピック・パラリンピック。それは地域のスポーツ活動を支える総合型クラブにとっても、総合型クラブの存在意義を、地域にそして国民にアピールするチャンスでもあります。今回は、オリンピックと総合型クラブの関わり方の一つである「スポーツボランティア」についてお話を伺いました。

写真左から／二宮雅也氏、菊地正氏、但野秀信氏

対談者

菊地 正氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF 副理事長
総合型地域スポーツクラブ公式メールマガジン 編集委員長

二宮雅也氏

文教大学人間科学部人間科学科 准教授

但野秀信氏

NPO法人日本スポーツボランティアネットワーク
公益財団法人笹川スポーツ財団

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ
テーマ 1

スポーツボランティアとは

—日本のスポーツにおけるボランティアの歴史—

スポーツボランティアは
“日常の風景”という意識を

菊地（以下、敬称略） 総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）の認知度向上は、各地域の大きなテーマです。そこで2020年東京オリンピック・パラリンピックへ向けて、どのような協力の方法があるのか、この座談会で、そのヒントや具体的なアイデアを見出せればと思います。

但野 まずは、日本スポーツボランティアネットワーク（以下、JSVN）の設立経緯からお話いたします。私は笹川スポーツ財団の職員です。笹川スポーツ財団は、スポーツフォーエブリワンをスローガンに、生涯スポーツの振興を図っている団体です。以前より、笹川スポーツ財団では、諸外国で行われていた都市型マラソンの日本開催を目指し、諸外国の事例調査などを行っておりまして。そして、運営の中心となっていたスポーツボランティアに着目し、スポーツ・ボランティアリーダー養成研修会を05年から開始し、07年の第1回東京マラソンでは、7百人のボランティアリーダーと1万人のボランティアとともに運営にあたっています。その後、09年の第3回大会まで、日本財団の助成を受けてスポーツボランティアの運営管理を行いました。

同時期に、全国で増え始めたラウンジイベントの主催者からスポーツボランティアに関する多くの問い合わせがあり、それまでの経験をお伝えしていました。そんな中、11年に笹川スポーツ財団が行ったスポーツボランティア団体に対する調査により、一番の課題は実際に活動する機会が少ないことであるとわかりました。

そこで、地域のスポーツボランティア団体が集まり、スポーツボランティアの活動機会の提供や養成事業を共有することで、日本のスポーツボランティア団体の活性化に貢献できるのではないかと考えました。そして、12年7月にNPO法人の認証を受けJSVNが設立しました。

菊地 NPO法人認定後の活動は、どのようなものでしょうか？

但野 JSVNは、先にも述べた



菊地 正

とおり、活動機会の提供や養成事業を共に行う日本のスポーツボランティア団体のネットワーク化を目的として活動しています。20年東京オリンピック・パラリンピックは、我々にとっても一つの契機ではありますが、そのために作られた団体ではないのです。

菊地 JSVNの講習会で講師を務める二宮さんは、スポーツボランティアについて、どのようにお考えですか？

二宮 スポーツボランティアという言葉を初めて聞く人には、まず、特別な活動ではないことを伝えていきます。私が少年野球をしていたころ、父が運転する車にチームメイトも同乗する、あるいは、母が差し入れてくれたおにぎりなど、ボランティア活動はスポーツの中に当たり前のよう存在していました。地域レベルで見たら、野球が得意なおじさんが少年たちに野球を教えることもそうです。そのように日本の社会に当たり前にあったことだとイメージしてもらおうようにしています。



二宮雅也

初めてボランテアを募集した 86年神戸ユニバーシアード大会

二宮 市民レベルの活動が、次第に大きなイベントにつながっていく、そのような歴史が日本のスポーツにはあります。

かつて、スポーツイベントの開催は多数の関係者のお手伝いによって成り立っていました。いろいろな関係上、お手伝いをせざるを得ない人たちもいたというのが実状だったと思います。それが86年の神戸ユニバーシアード大会で、初めて市民の皆さんにボランテアをお願いする呼びかけをしたのです。そこから大きなイベントでボランテアの人材を運営に生かすモデリングが少しずつ増えていきました。そのあとに行われた98年の長野オリンピック、02年の日韓ワールドカップでは、かなり組織化したボランテアの募集や運用がされました。この頃にスポー

ツボランテアという一般的なイメージができあがったのだと思います。

そして、05年から笹川スポーツ財団を中心に、第1回東京マラソンを意識しながらボランテアリーダーの育成など、専門性の高い講習を重ねていきました。それが日本にスポーツボランテアが広がった歴史ですよ、と話しをして、身近なものだと感じていただいています。

また、一般のスポーツボランテアの講習では、東京マラソンでのボランテアの活動の動画や写真など、映像を見せながら説明することも重視しています。ただし、スポーツボランテアは大会だけのものではないことも強調します。イベントを支えるボランテアはスポーツボランテアという認識が根深くある中で、総合型クラブでの活動や日常的なスポーツを支援する人、障がい者スポーツをサポートする人もスポーツボランテアであり、そう考えると活動の幅は想像するよりも広いものです。

菊地 私も、総合型クラブの関係者から「クラブ作りを、やらされている」といった雰囲気を感じたときは、もともとはボランテア精神から始まったことであるという部分を強調して伝えるようにしています。我々の日々の活動は、地域の協力のもとクラブ作りをす

ることであり、受益者負担で自立した運営をすることが総合型クラブ本来の主旨です。是非、ボランテア精神とともに東京オリンピック・パラリンピックを成功させ、それが20年以降の日本のスポーツ界や総合型クラブの生きる道へとつながればいいと思います。各連絡協議会では、20年に向けてどのような協力ができるのか、そして、どのように総合型クラブの知名度を上げるのかを討議しています。これからはより具体的な話をしなければならぬと思っています。

二宮 スポーツボランテアは、自分のためにする側面が強くても構わないと思っています。スポーツという単語がボランテアの前からあるので、自分がしたいからする、それでいいのです。それが、気がついたら誰かのためにもなる。そのように伝えていきます。



但野秀信

菊地 そこがスポーツボランテアの原点ですね。

二宮 群馬県の新町スポーツクラブでは、早い時期からユースボランテア制度を、唯一総合型クラブで導入していました。現役の大學生がボランテアとして関わるなど、以前から“人”に注目しています。

菊地 64年の東京オリンピックのとき、私は中学1年生でした。当時は、周辺のほとんどの小・中学校が休校になり国立競技場で国旗を掲揚したり、マラソンのコースだった甲州街道を掃除したりしました。当時、中学生だった私は、ボランテアという言葉は知りませんでした。大歓迎ムードの中、わくわくしながら大人と一緒にお手伝いしたという記憶が残っています。ボランテアとは本来そういうもの。ドイツの総合型クラブもボランテアによって支えられています。日本はまだボランテアに馴染みがありませんが、二宮さんが言うように、生活の中に当たり前のようにボランテアが入っていかばいいのだと思います。その辺も今度のオリンピック・パラリンピックで国民の皆さんに理解してもらえるといいかなと思っています。

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ
テーマ 2

総合型クラブとスポーツボランティア

—さまざまな関わり方のカタチを考える—

するスポーツと同様に
支えるスポーツの普及を

菊地 神奈川県総合型スポーツクラブネットワークでは20年に向けて、スポーツに特化したスポーツ英会話に取り組んでいます。また、3月の横浜マラソンの給水所を県内の総合型クラブがスタッフを出して担当することになりました。このことでスポーツボランティアの楽しさを知っていたら、オリンピックに向かっていけたらと思っています。全国的な事例ではなく恐縮ですが、我々のクラブ（以下、SELF）では、地域に住むアフリカのコンゴ出身の方をきっかけに、国際交流の話を持ち上がりました。今、現地のオリンピック委員会と連絡を取って、オリンピック選手に来日していただく準備を進めています。但野さんは、総合型クラブがスポーツボランティアとしてできることは、どういったことだと思えますか？

但野 最近の例ですが、行政で初めてJSVNの会員になっていただいた館山市の「若潮マラソン」があります。30回以上開催され、現在では1万人規模のイベントになっていますが、今までは関係者に声をかけて人を集め運営されていました。これからはJSVNと連携することで市民が自主的に参加するスポーツボランティアを増やす



し、その受け皿として総合型クラブや行政が協働する方法などを共に模索してきたいと考えています。そんなこともあり、先月、館山市民の方に広くスポーツボランティアの楽しさを知っていただくため、お話をさせていただいたところです。

菊地 実は、SELFでも今、館山市の農家の方とタイアップをして、子どもたちが田植えや稲刈りを体験する場の提供やアスリートの方に農家の皆さんと米作りをしてもらうイベントなどにご協力いただいています。また、館山市では殺陣教室が人気なのですが、教室のリーダーをSELFのメンバーがしています。館山市では、地元のお祭りを地域のみんが支えるなど、地域がまとまっている印象を持っていました。若潮マラソンのスポーツボランティアとしての取り組みも小さな声掛けから、

さらに地域に愛されるイベントになる気がします。地域の小さなイベントが発展して大きなイベントへと成長する、日本はちょうどその時期にあるのだと思います。

総合型クラブは、指導者を含め、地域のボランティアに頼っている現状です。しかし、ボランティアだからといって、質の向上を考えなくていいわけではありません。施設が学校の体育館だろうが、コートの質を保つことは非常に重要な問題です。スポーツボランティアは運営だけでなく、指導についてもさまざまなノウハウを持っていると考えますが、JSVNの講習会は誰でも参加できる仕組みなのでしょいか？

但野 スポーツボランティアを学ぶ研修会は4つの階層に分かれていて、中学生以上であれば誰でも参加可能です。ただし、プログラムにより1500〜6000円の受講料をいただき、修了証やライセンスを発行しています。

菊地 ライセンスなどの環境が整いつつある中、これから総合型クラブができることについて、二宮さんはいかがでしょうか？

二宮 全国の総合型クラブに共通するのは、スポーツに対して前向きな人たちが関わっているということだと思えます。国が示したス



スポーツとの関わり方の中で、「するスポーツ」の身近な拠点の一つに総合型クラブがあるのは、非常にわかりやすい構図です。これでスポーツの「D.O.」の部分が増えることは、十分期待できると思います。次に、「みるスポーツ」について、これは残念ながら身近にビッグクラブがある地域と、テレビでの観戦が主になる地域の差は、総合型クラブだけの活動ではクリアできない部分であります。

そして、「支えるスポーツ」について、総合型クラブは、このことについても普及の命題を抱えていることを、クラブマネージャー含め関係者が意識することが大事だと思います。スポーツボランティアは、スポーツをするのと同じくらい楽しいものだとして理解していただきたい。種目数を増やして会員の満足度を上げる努力をするように、

スポーツボランティアの活動機会を提供することも真っ先にすべきだと思います。

総合型クラブも積極的に「支える」楽しさを発信する

二宮 例えば、15年にスタートする横浜マラソンという地域のイベントに、総合型クラブが積極的に関わるのは非常に大事なやりかたです。なぜなら、その地域のスポーツイベントに、日頃のスポーツ活動を支える総合型クラブが関わるのはごく自然な姿だからです。横浜市がそのような事例を提示し、実際に参加したスポーツボランティアの方々が「すごく楽しかった」と感じてくれて、そのほかのクラブ会員に語ってもらう。そういった活動が広がることで、積極的な楽しみの関わり方がデザインされていくのだと思います。スポーツを支える楽しみをどう立案するか、それが総合型クラブに求められる発想力です。スポーツボランティアは嫌々するものではなく、スポーツをするのと同じ爽快感を味わえるものなのだという前提に立って、クラブの皆さんに紹介していただきたいと思っています。

菊地 支えるスポーツの普及の重要性については、私も身近に関わりながら気づかなかったことですね。



二宮 支えるスポーツの普及は地域差がなく広くチャンスがあるものです。行政もそういう発想を持って総合型クラブを支援し、クラブ側も行政に対して関わり方の支援を要求する。総合型クラブには、スポーツをする場の提供だけでなく、その楽しみ方をさまざまな力タチで提示することも求められています。多様な可能性を探るための勉強会などはJSVNや地域のボランティア組織とも連携しながら行うべきだと思います。

但野 ロンドンマラソンでは、地域のボランティア団体に優先出場枠があり、その出場枠をチャリティーとすることでボランティア団体の活動資金となる仕組みを作り上げています。また、日常のボランティア活動の貢献度によって優先出場枠の数が変わるため、日々

の活動や大会を盛り上げることが、団体の活動資金の確保にもつながるといっていいと思います。

ボランティアがランナーを一生懸命に支えることで大会の雰囲気も良くなり、ランナーも楽しく参加できます。ボランティア・ランナー・主催者にとって好循環のイベントになっています。

菊地 そのような仕組みは、日本でもぜひ実現したいですね。

但野 チャリティーイベントは、東京マラソンや大阪マラソンなどで行われています。私は、チャリティーを通じてスポーツの応援も支えるスポーツの一つだと思っています。

菊地 我々も横浜マラソンで経験するスポーツボランティアの楽しさは、今後、ぜひアピールしていきたいですね。

みんなで
“参加する”
オリンピック・
パラリンピックへ
テーマ 3

始めよう！ スポーツボランティア！

—スポーツを“支える”文化をレガシーに—

**主役は選手だけではない
それがボランティアの魅力**

但野 これまで関心のなかった人たちが、20年東京オリンピック・パラリンピックを目指してスポーツボランティアを学び、大会に参加したいと考えてくれることは、とてもいいことだと思います。しかし、特に大きなイベントは一過性の要素も多く含んでいます。20年の大会後もボランティア活動が続いていくため、大切なのは地域でのボランティア活動で楽しみを見出すことだと考えます。その重要な活動の場の一つが、総合型クラブなのだと思います。総合型クラブに関するボランティアの情報について、さらに探しやすい仕組みづくりを今から整えることが求められるのではないのでしょうか。

菊地 たしかに我々の関心は20年以降に、その意識をどう継続していくかという部分にあります。

二宮 その答えは一つで、常に活動の機会を提供するということです。オリンピック後に冷めてしまうのは、次の活動が決まっていなから。オリンピック以外にも、大きな大会はたくさんあります。継続することで仲間もできて、仲間との活動が新たな楽しみになる。そういう楽しみ方を、先に伝える



ことが重要なのです。

菊地 総合型クラブがすべきことは、活動の場を提供し続けることです。

二宮 今すぐ全国ですべきなのだと思います。総合型クラブは、具体的な活動の場の提供やほかの大会との連携を図れる可能性を持つ組織です。20年は、その関係性を加速させる意味でも重要な大会になります。

菊地 オリンピック・パラリンピックに向けて、そして、終了後も含めて全国の総合型クラブにとって、この5年間は重要な期間です。明日からでも小さなイベントから盛り上げていく意識を持たないといけません。

二宮 教育との連携という意味で、今の道徳教育の副読本には視

覚障がい者の伴走をしている方が載っています。スポーツボランティアが紹介されているのです。スポーツボランティアの教育的なプログラムをクラブ会員だけでなく、地域の人たちに提供する講習会なども、総合型クラブが取り組むべき活動なのだと思います。実際に、多摩地域にあるスポーツクラブでは、伴走教室を開催したという事例があります。

菊地 SELFでも障がい者スポーツの場づくりを積極的に行っています。ダンスや卓球、カラオケなど週1回の活動を1年間続ける中で、参加した子どもたちがすぐ前向きになりました。地域のイベントにも参加するようになり、スタッフとしてお手伝いもしてくれています。その子たちにとって、今、パラリンピックではなく、オリンピックのボランティアをするとい





うことが大きな夢になっています。

但野 20年は、障がい者スポーツへの理解を深める機会であり、海外から訪れる多くの外国人の方との交流により異文化に触れる機会ともなるでしょう。たくさんの人を受け入れるためには、まず「知る」ことが重要だと思っています。今後JSVNでは、障がい者スポーツにおけるスポーツボランティア活動や異文化を学ぶカリキュラムを実施する予定です。実は、最近ボランティアの方から要望が多い内容なのです。

菊地 そのような受け入れ体制の作り方などは、64年の大会とは全く違ったものになりますね。

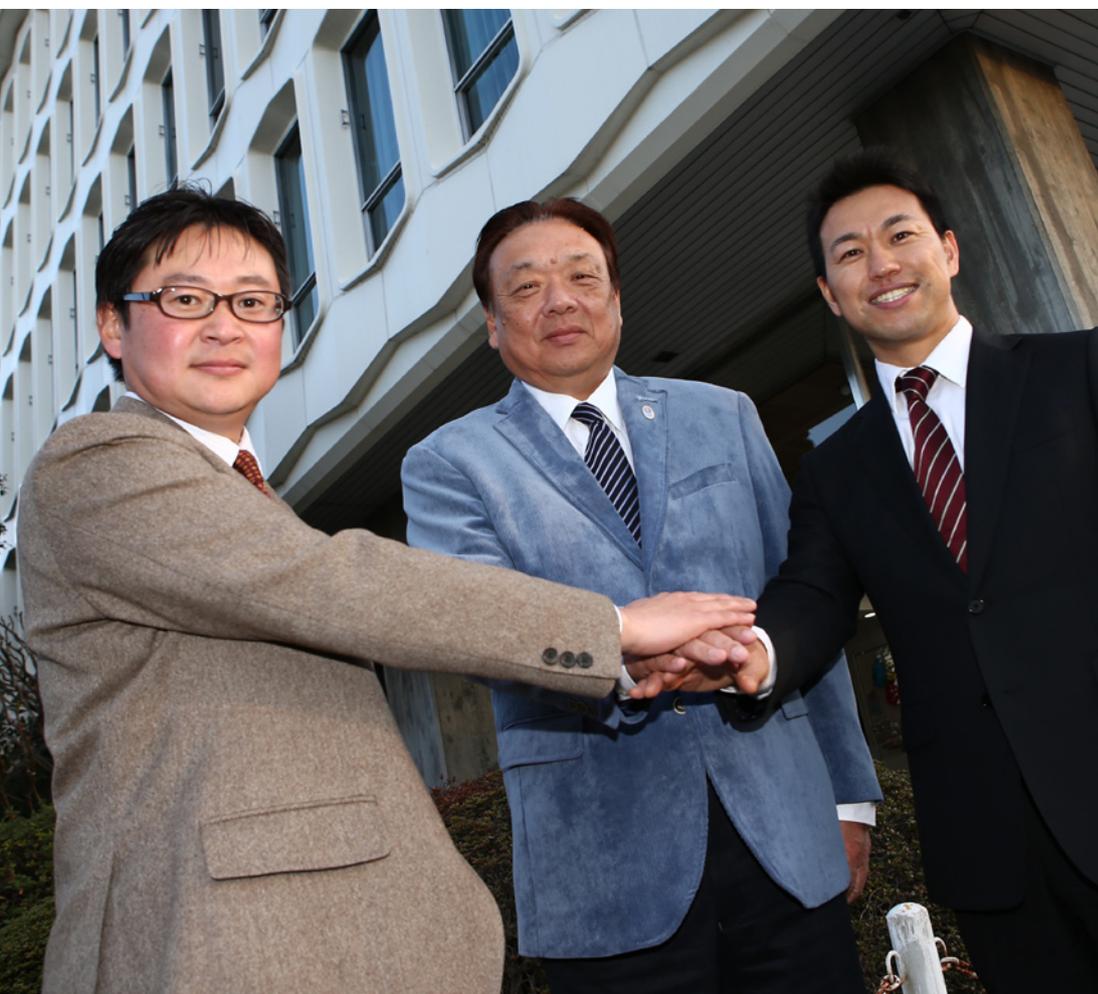
二宮 64年が『競争』だったとするなら、20年は『共生』でしょうね。競技場や選手村などのインフラ整備は、労働力として国際的な支援

が必要です。総合型クラブは、その人たちと地域社会にいい交流の機会を与える装置になるかもしれません。スポーツを入り口に交流ができる場である総合型クラブは、そういった一番難しいことを担う重要なポジションなのです。

但野 スポーツボランティア活動は、年齢や性別、社会的立場や障がいのある・ないに関わらず、いろいろな人と交流できる場でもあります。そういう環境は少ないと思いますし、そういった意味でも有意義で魅力的な活動だと私は思います。

菊地 ボランティアはすればするほど、自分の経験や感動になるのは確実に言えることです。それは、総合型クラブのメンバーも実感していますし、参加者も世代を越えた交流に関しては、文句なしに満足してくれているところです。こういったことを、もっと対外的に発信していきたいですね。

総合型クラブは知名度や運営側と会員の意識の違いなど、まだまだ問題を抱えています。会員の皆さんにもクラブを作るという意識を持っていただくことが、100年続くための必須条件ではないかなと思います。そのための準備をしながら2020年を迎えて、さらにその後にも生かしていきたいと思っています。



但野 今、スポーツボランティア活動に参加したい人からの問い合わせがとも増えています。しかし、その方々の活動の受け皿になる組織が不足しているというのが現状です。スポーツボランティアとして受け入れてくれる団体との

つながりを築くことがJSVNの目的です。まだまだ微力ですが、スポーツボランティアをしたい人と、その活動を必要とする場をつなぐネットワークとして、日本のスポーツボランティア活動を推進していきたいとJSVNは考えています。